

婉子女王(三)

——栄花物語人物考——

杉崎重遠

岐路に入る感がないでもないが、婉子女王以外の女御たちが入内した頃の年齢を考へて見よう。三人の女御のうちで、現在のところ、その年齢を明かに出来るのは朝光女の姚子だけである。即ち、小右記の永祚元年（九八九）五月廿九日の条に、

……左大将女御午時許逝去云々、于時年十九、

とあるのによつて明かにされるのである。大日本古記録本小右記はこの「左大将女御」の右傍に「藤原朝光女姚子、姚一作姫」との註記を添へてゐるが、仮にこの註記が見られなくとも、公卿補任（国史大系本）の当年の条乃至一代要記（改定史籍集覧本）の一条天皇・大将の項を繙けば、いふところの左大将が朝光であることが一目瞭然となる故、いふところの女御を直に姚子に比定出来るであらう。それはともかく、現在のところ、姚子の年齢を考へる場合に拠るべき資料はこの小右記の記事しか見当らないが、これで事は足りるであらう。さて、ここに永祚元年に十九歳で永眠したと記されてゐるので、逆算するに姚子の誕生は天禄二年（九七一）のこととなる。従つて、花山天皇の後宮に入った永観二年には十四歳であり、婉子女王より一歳年長であつた。

一代要記はその出自について「大納言朝光一女 母式部卿重明親王五女」と言つてゐるが、大体に於いて信じてよからう。ここに大体と言つたのは、諸書によつて部分的に相異点が見られるからである。先づ、栄花物語は如何と言ふに、

この大将殿は堀河殿の三郎、あるが中にめでたきおぼえおはしき。今は世に捨てられ給はず。母上は九条殿の御女。登華殿の内侍のかみの御腹に、延喜の帝の御子の、重明の式部卿の御女におはします。その姫君にて、世にをかしげなる御おぼえおはす……

と言ひ、更にその所生について、

……男君達二人この姫君とおはすれば……

——同上——

と言つてゐる。「この姫君」と言ふのは姚子のことであるが、これらの記事より綜合するに、栄花物語の作者は、姚子が朝光と重明親王女との間に生まれ、同胞として男兄弟二人——三条西家本に添ふ勅物に従へば、朝経・登朝——があつたと解してゐたと言へよう。そして、姉妹を外に記してゐないところより推すに、朝

光と重明親王女との間には姚子以外には女子がなかったと言へよう。従つて、一代要記の言ふ「朝光一女」は真実を伝へてゐると言へよう。ここに注意しなければならぬのは、母について、單に「重明親王女」と言つてゐることである。

榮花物語と言へば思ひ出されるのは大鏡であるが、それには如何に取扱はれてゐるであらうか。その意圖の下に徳川本大鏡（岩波文庫本）を見るに、そこには、

……又堀川の摂政殿（兼通）の御二郎……これは又、閑院ノ左大将朝光と申しをり……北ノ方には、貞觀殿の内侍のかみの御腹、重明の式部卿の宮の御中姫君ぞ、おはせしかし、その御腹に、男君三人、女君（姚子）のかゞやくごとくなるおはせし。花山院の御時まゐらせて……

— 中・兼通 —

と記されてゐる。朝光と重明親王女との間の唯一の女子であつたとしてゐることは榮花物語と軌を同じうしてゐる。綱纂物とはいへ一代要記の記事を文学作品である榮花物語・大鏡等のそれで考察するのは本末顛倒の謗を招く嫌ひがあるが、姚子を朝光一女とすることは榮花物語乃至大鏡の書かれた頃にも信ぜられてゐたことであらうから、この点に關する限り、一代要記の所説を信じてよからう。

一方、榮花物語の記事と大鏡のそれとの間の相違点を拾ふなら二個条得られるが、その一つの朝光と重明親王女との間に儲けられた男子の数の相違の検討は当面の問題ではないので、ここにはそのことを指摘するのみにしておかう。よつて、現在問題にしない

ければならないのは今一つの問題——重明親王女の輩行である。榮花物語は單に「重明親王女」とのみ言つてゐるのに対して、大鏡は「重明親王の御中姫君」と言つてゐる。これは共に一代要記にいふ「重明親王五女」と相違してゐるので、三者のうちのいづれに従ふべきか迷はざるを得ない。今のところ、適確にその輩行を探るに足る參考資料もないこととて、既知事項より言へば、輩行を特に記してゐない榮花物語の所説に従つておくのが穩当ではなからうか。

註一 本朝皇胤紹運錄（新校群書類従本）は重明親王の王女として、徽子女王（斎宮女御）と旅子女王の二人を挙げ、尚、徽子女王の母を貞信公女と記してゐる。日本紀略（新訂増補国史大系本）の承平六年（九三六）九月十二日の条に、トコ定伊勢斎宮。彈正尹重明親王女徽子女王ト食。年八……

とあるので、徽子女王は延長七年（九二九）の誕生となり、同書の日曆元年（九四七）二月廿六日の条に、

以ニ悦子女王一定伊勢斎王。年六。從ニ殿上ニ差。右近少將藤原有年。仰リ遣父中務卿重明親王家。……

とあるので、悦子女王は天慶五年（九四二）の誕生となるのである。本朝皇胤紹運錄及び日本紀略等を綜合するに、

重明親王に徽子・旅子・悦子等三人の女王があつたことになるが、ここに斎宮記（新校群書類従本）に、

旅子内親王旧名悦子醍醐孫重明親王女天曆元年為斎

とあるので、旅子女王と悦子女王と異名同人であることが

明かになるであらう。又、大日本史料第一編之八引くところの李部王記に、

天慶八年正月十八日、乙卯、成時室正五位下藤原朝臣寛子卒、四十

——河海抄・二・夕顔——

と見えてゐる。この女性は、日本紀略がその天慶八年（九四五）正月十八日の条に、

中務卿重明親王室家藤原氏卒。^{基経女}伊勢齋王母也。仍齋王退出。

といふ女性に該当するが、只、藤原氏の右傍の「基経女」との註記は、尊卑分脈が忠平の女子の二番目に、

母 女 子式部卿重明親王北方

との脚註を施してゐるので、忠平女とあるべきである。更に、姚子の母即ち朝光の北の方の母について、榮花物語は「九条殿の御女、登華殿の内侍のかみ」と言ひ、大鏡が「貞観殿の内侍のかみ」と言つてゐて、登華・貞観とその殿舎の名の点で相違を見せてゐるものの、同じく大鏡が師輔の女子に触れてゐる部分で、

……このきさいの宮（安子）の御おとゝの中の君は、重明式部卿の宮の北の方（登子）にてぞ、おはしまし……さて、後の宮もうせおはしまして後に、めしとりて、いみじう時めかさせ給ひて、貞観殿の内侍のかみとぞ申しゝかし……

——中・師輔——

と言つてゐるので、師輔二女の登子その人の呼称を二様に

伝へてゐるに過ぎない。その呼称の相違については今詳しく述べる必要はなからう。只、注意すべきは、寛子と登子との世系上の位置である。これに關して、尊卑分脈を見るに、

忠平 — 師輔 — 登子
 |
 寛子

の如く一世代を隔ててゐて、登子は寛子の姪に相当してゐる。それ故、寛子と登子とが重明親王の北の方に備つたにしても、そのことは同時に起つたのではなく、伯母の寛子の永眠後に姪の登子が後添になつたと解すべきである。従つて、登子が重明親王の北の方となつたのは天慶八年以後のことではなければならない。仮に一年の服喪期を終えて重明親王が登子を迎へたとすると、後に朝光の北の方となつた某女王を儲けたのは、早くとも天曆元年のこととしなければならない。そして、某女王が誕生した時には、現在知られる限りでは、徽子・旅子の二女王が姉として居た故に、少くとも大鏡の言ふ如く「中の君」としてではなかつたことは確言出来よう。従つて、榮花物語の言ふ如く、「重明親王女」と輩行を明かにしない方が賢明なのではなからうか。

次に頼忠女の誕子の年齢であるが、その卒年は、左経記（史料大成本）が、

……伝聞、四条宮女御卒去云々、

とその長元八年（一〇三五）六月廿一日の条に記してゐるので、長元八年であることが判明するものの、如何せんそこに享年を闕いてゐるので、何とも年齢を考へる手懸りはないのである。よって、その輩行について考へて見よう。

一代要記がその輩行を含めて、出自を「太政大臣頼忠四女母中務卿代明親王三女」と言つてゐることは既に述べた通りであるが、この輩行にして事実を伝へてゐるなら、直に一代要記の説に従つて筆路を進めて行けよう。ところが、第一項に於いて触れておいた如く、榮花物語は、

……太政大臣、この御世にもやがて閑白させ給ふ。中姫君十月に参らせ給ふ…… — 花山たづぬる中納言 —

と記して、禊子を以て「中の君」と看做してゐるのである。勿論、これは、

……左の大臣の御さまいとくめでたし。大姫君を、いかで内に参らせ奉らんとおぼす。果敢なくて月日も過ぎて冬になりぬ。年号かはりて天元元年といふ……

—— 同上 ——

の如く、後の円融天皇皇后遵子を目して「大姫君」としたことから起つたと言へよう。又、大鏡は如何と言ふに、

……さるは、帥ノ中納言殿（隆家）のうへの六条殿（重信）の姫君は、母は三条殿の御女にておはすれば、御孫ぞかし……故中務の宮代明親王の御むすめの腹に、御むすめ二人おはしまして、大姫君（遵子）は円融院の御時の女御にて、天元五年壬午三月十一日に、后にたゞせ給ひて、中宮と申しき、

御年廿六、皇子おはせず、四条の宮とぞ申すめり……今一とこの姫君（禊子）、花山院の御時の女御にて、四条ノ宮に尼にておはすめり。やがて后女御ひとつはらの男君、只今の按察大納言公任卿と申す…… — 上・頼忠 —

とあって、ここにも遵子の大姫君に対する「今一とこの姫君」と記されてゐて、代明親王王女の所生の女子二人のうちの一人に数へられ、男兄弟として公任一人を挙げてゐる。但し、ここには、その母についての伝へを闕いてはゐるが、源重信室である女子を記してゐるのは注目し得る。母の關係よりこれらの人物を通観するに、尊卑分脈は公任・遵子・禊子の母を「中務卿代明親王第三女」としてゐるのに対して、「左大臣重信公北方」と注意してゐる女子の母を闕いてゐて、かの大鏡の所説と軌を一にしてゐるのは面白い現象である。

それはそれとして、榮花物語・大鏡共に遵子を以て大姫君と記し、禊子を以てその妹と看做してゐることを迎へて考へるなら、禊子の姉妹としては遵子しかなかったやうな印象を与へられるのである。即ち、代明親王王女の所生の女子としてはこの二人のみであつて、重信室は他腹の所生と解さなければならぬであらう。これを機械的に解すれば、禊子は嫡出の二女といふことになるが、果してそれでよいのであらうか。

日本紀略を見るに、

左大臣二女遵子入掖庭。准二女御。被免釐。

との興味深い記事載せてゐる。事は天元元年（九七八）四月十日の条に見えてゐるが、一体、日本紀略は何によつて遵子を二女

と看做したのであらうか。若し、日本紀略の言ふところにして眞を伝へてゐるなら、その妹と榮花物語なり大鏡なりが解してゐる謎子は二女又はそれ以下であつたとしなければならぬであらう。三女であるかそれ以下であるかは僅少な差であらうが、一代要記のいふ「四女」に関心を持つならば、決して輕々に看過し難いのである。日本紀略のこの日以後の遵子に関する記事は勿論のこと、謎子に関する記事を見ても、謎子の輩行は明記されてゐない。それ故、日本紀略のみに従つてゐては、到底、謎子の輩行を明かにし難いので、他の資料に就かなければならないのである。

他の資料と言へば、思ひ出すのは先に挙げた小右記の永観二年十二月四日の条である。即ち、この日の条の大半は係つて謎子の許に御書使のあつたことを伝へてゐる。かく言へば、賢明な説者はそこに「従内有御書、被遣三君、御使藏人大舍人助信助」との一節のあつたことを想起されてゐるであらう。いふところの三君が、仮にその右註の「藤原謎子」との注意がなくとも、それ以前の關係記事からして謎子を意味してゐることは直に諒解出来るであらう。これとかの日本紀略のいふ「二女遵子」とを結び付けるなら、二女遵子・三女謎子と一女は明かでないにしても、一応姉妹の順位を探り得たことになるのではなからうか。

……今夜奉宣旨、以藤詮子為宣旨、
〔太説〕源重信
是皇后大夫妻、中宮姉、信濃守 以藤原汎子
〔藤原〕參議佐、理妻、以藤原近子為内侍、信濃守 ……
為御匣殿別当、
〔藤原〕參議佐、理妻、以藤原近子為内侍、信濃守

との小右記の天元五年三月十一日の条を見た際、如何なることが腦裏に浮ぶであらうか。事は女御遵子が皇后に冊立された夜に、

皇后附の女官たちの任命のことに係つてゐる。その母は依然として知られずながら源重信室を以て中宮即ち遵子の姉としてゐることは、頼忠の女子を数へるに、一女詮子・二女遵子・三女謎子としてゐたからではなからうか。但し、謎子の名がここに見えないのは事が皇后附女官の任命に係つてゐるからではあるが、或いは謎子が未だ成人してゐないことを暗示するものではなからうか。かくして、漸く謎子の輩行を追求して三女なることを明かにし得たが、未だ謎子の年齢を推測し得る段階に到つてゐない。勿論、その姉の遵子の年齢は、一応、大鏡によつて天元五年（九八二）の立后當時廿六であつたことを明かにし得てゐる。そして、この数字が一代要記の所説とも一致してゐる。これより逆算すれば、遵子の誕生は天徳元年（九五七）のことになるが、この逆算から得た数字は、一代要記が、

天皇太后藤遵子寛仁元年六月朔
日崩年六十一

と言ひ、日本紀略が、
——丁集・一条天皇・後宮——

天皇太后宮藤原遵子崩。年六十一。

——寛仁元年六月一日条——

と言つてゐる崩年の寛仁元年（一〇一七）より逆算して得た年紀とも一致してゐる。それ故、謎子が花山天皇の後宮へ入つた永観二年に遵子は廿八歳であつたが、如何に遵子の年齢を追求して見ても、謎子の年齢を探る便とはならないのである。といふのは、日本紀略が、その天元五年五月八日の条に、

侍從藤原公任叙〔順忠〕從四位上。去夕中宮自〔順忠〕太政大臣四條第二入

内賞。皇后同産之弟也。

と言つてゐるが、これによると、公任も遵子より年少であつたのである。さりながら、この記事を以てしても、謁子の年齢を明かにし得る資料とはし難いのである。といふのは、謁子・公任が共に遵子より年少であつたことは判明するものの、謁子・公任間の長幼の序については一向に明白にならないからである。因に、公任が中宮遵子入内賞として従四位上に叙せられたことは小右記の同日の条には見えないが、中古歌仙三十六人伝（新校群書類本）の藤原公任の項に、

……五年（遠云、天元）五月叙（従四位上）……

とあり、その任参議のことに触れてゐる公卿補任の正暦三年の条の略歴のなかに、

天元三年二月廿五日正五位下。（十五、於天皇御前加元服日所叙也）……五年五月八日従四位上。（皇后入内賞）……

とあるので信じてよからう。そして、ここに挙げた公卿補任の一節には、天元三年（九八〇）に十五歳、正暦三年（九九二）に廿七歳と見えてゐるが、天元三年に十五歳と言へば公任の生れたのは康保三年（九六六）となり、正暦三年に廿五歳と言へばこれ亦康保三年の誕生となる。尚、扶桑略記にもその長久二年（一〇四一）正月一日の条に、

入道前大納言公任薨。年七十六……前関白太政大臣藤原朝臣頼忠嫡子也。

と記されてゐるが、長久二年に七十六歳と言ふことより逆算するに、依然として康保三年の誕生となるのである。従つて、康保三

年より数へて行くと天元三年には十五歳となるので、公卿補任の天元三年に十五歳と言つてゐるのも正確に元服当時の年齢を伝へてゐるのである。

ここに到つて問題になつてくるのは、謁子が公任の姉であるか妹であるかといふ点である。姉であるなら永観二年にはその姉の遵子が廿八歳であり、公任が十九歳であつたから、謁子は廿七歳から廿歳までの間であつたとしなければならぬ。姉の遵子が入内し女御となつた天元元年当時十八歳であつたのに比べて、恰好な女性があるかつたかも知れないが、謁子のこの年齢ではやや年老けてはゐないだらうか。又、妹であつたとすると、十八歳以下と見なければならぬが、入内してゐるからには幾ら若く見積つても十四・五歳には達してゐたであらう。姉であるか妹であるかについて、明確に断定してゐる史料、殊に記録類は今のところ見当らないが、

三月つごもり服におはする頃

別れにし影さへ遠くなりゆけば常より惜しき年の暮かな

御妹の女御

春しらぬ宿には花もなきものを何かは過ぐるしるしなるらむとの前大納言公任卿集（校註国歌大系本）の唱和が一応教へてくれるのではなからうか。前の歌は公任の歌であるが、それにつづく歌の作者をここに「御妹の女御」としてゐる。公任と同じ題意の歌を作つてゐるのであるから、この「御妹の女御」は公任の妹と考へなければならぬであらう。若し、公任の周辺に於いて女御を求めるなら、謁子しか得られない。従つて、これを逆に言へ

ば禊子は、公任の妹と考へられよう。幸にしてこの推論が許されるなら、禊子は十八歳以下十四・五歳で入内したことになるが、果してそれでよいであらうか。

当時の記録として伝世してゐる小右記には頼忠一家のことに係る記事が多いが、小右記の筆者実資が頼忠の弟斎敏の子であり、その頼忠が実頼亡き後の小野宮一流の棟梁となつてゐたことよりすれば、記事の多いのも当然のことである。そのことより考へるに、禊子着裳のことを伝へた記事が小右記にあつたらうとの推測を下しても強ち無稽の言ではなからう。又、この永観二年冬の条には禊子に関する記事が多く記されてゐるが、既に挙げたもの以外に、即ち永観二年十二月四日の条以前の記事として、

……依召参殿、栗燭罷出、被定仰女君入内之雜事等、

との十一月十五日の条があるが、この条と先の十二月四日の条との間に於いて禊子著裳のことに触れてゐる記事の見当らないのは勿論のことである。又、十一月十五日の条に先立つ部分、即ち現存する小右記の永観二年冬の条の冒頭の十月一日の条にまで溯つて見ても、依然として禊子著裳の記事は見出せないのである。このことより推すに、著裳のことのあつた下限は永観二年秋に求めべきかも知れない。但し、現在のところ、小右記は永観二年春・夏・秋の条・永観元年四季の条・天元五年秋・冬の条等を闕失してゐるし、伝世してゐる上限の天元五年春・夏の条等にも著裳の記事が見えないので、果して何時頃著裳したものか追求する方策はないのである。仮に公任が加冠した天元三年に十二・三歳で著裳したとすると、入内した際には十六・七歳といふことにな

るが、これは飽くまで推測の域を出てゐない。又、禊子と公任との年齢が極く接近してゐたとして、公任十五歳・禊子十四歳を基礎にして計算するなら、入内の際には十八歳となるであらう。いづれにしても、入内時の禊子の年齢をいくら多く見積つたところで、花山天皇より一歳年長の十八歳以上であつたとは考へられない。それ故、禊子と花山天皇とは年齢の点で余り懸隔はなかつたらうと思はれる。既に明かになつた婉子女王なり姚子なりの入内当時の年齢を参考にして、憶測を逞しうするなら、禊子は公任より二三歳年少ではなかつたらうか。

序でながら、例によつて禊子の母に関する一代要記の記述を検討して見よう。それについて、一代要記は既に挙げた如く、「母中務卿代明親王三女」と言つてゐるが、本朝皇胤紹運録は、代明親王の王女として、

敵子女王〔従三頼忠公室〕

恵子女王〔従二位太政大臣伊尹公室〕

庄子女王〔天曆四入内為三女御。具平親王母。天皇崩後為三尼。母右大臣定方公女〕

の三人を挙げ、頼忠室の敵子女王を第一に記してゐる。かくの如く、前者は三女とし、後者は女子の第一としてゐて、両者間に甚しい相違を見せてゐるので、一代要記の言ふところに従つてよいか否かに迷はざるを得ない。従つて、そのことを考へるために、本朝皇胤紹運録にその名を伝へられてゐる女王三人の年齢を考へて見るのも徒事ではなからう。然し、第一に記されてゐる敵子女王については思ふところがあつて後に述べることとし、先づ、恵

子女王より始めよう。

さて、恵子女王の年齢は如何といふに、小記目録（史料大成本）の第廿二に、

同（遠云、正曆）三年九月廿七日、故一条摂政北方恵子女王
逝去事、
——庶人卒、付女、小児、法事——

とその歿年が記されてゐる。小記目録が小右記の目録といふ目的を持つものなので、かくの如く簡略な記事なのも亦已むを得ないといへ、それにしても享年の記されてゐないのは至極遺憾である。よつて、折角歿年が判明したところで、これだけでは今の場合何の役にも立たないのである。然らば、他に好都合な資料がないかと言へば、無いでもないのである。即ち、天延二年記（続群書類従本）がある。今、いふところの記事とは、その天延二年（九七四）十二月廿七日の条の

於二条殿寝殿^三奉^三為北方^三修法事。故少将^三為賀^三五十^三算平
生所^三命也。而其^三曰後^三為^三遂^三本意左大丞所^三令^三修也。

といふのを指すのである。ここにいふ北方・故少将・左大丞が何人であるか詳しい考察を要するが、それも煩はしいので省略して端的に言へば、左大丞即ち左大弁は公卿補任の当年の条によれば源保光に相当し、故少将は同年九月十日卒去した一条摂政伊尹の男、挙賢・義孝のいづれかに相当し、北方はこの二人の母である一条摂政の北方恵子女王に相当するのである。又、保光は恵子女王と父を同じうし兄妹の關係にあった。^{註五}そののみならず、保光の女は義孝の室であつたのである。それ故、この一文のいふところは、義孝が母の恵子女王のために五十賀算の法事を営まんとして

ゐたが、その本意を果さずして物故したので、義父の源保光が代つて妹のために賀算を営んだといふのである。そのことは今問題にしてゐることではないのであつて、要するに天延二年に恵子女王が五十歳に達してゐたことを明かにし得れば事は足りるのである。^{註七}天延二年に五十歳と言へば、その誕生したのは延長三年（九二五）であつたのである。

更に莊子女王は如何と言ふに、一代要記はその丙集に、

女御從四位上莊子女王 中務卿代明親王女母右大臣定方女天曆四年十月二十日為女御天皇崩後為尼寛弘五年七月十六日卒年

八十
——村上天皇・後宮——

と言つてゐる。この女王の実名が先の本朝皇胤紹運録にいふところと相違してゐるが、共に村上天皇の女御であつたことを伝へてゐるので同人であることは疑ふ余地はなからう。それに、日本紀略も寛弘五年（一〇〇八）七月十六日の条に、

……今日。前女御從四位上莊子女王卒。村上女御

と言つてゐるので、尚更信頼してよからう。よつて、一応、一代要記にいふところに従つて、この女王の生年を求むべきであるが、権記（史料大成本）にも亦、この女王の計報を伝へてゐるので、事を決する前に当然権記について看るべきであらう。即ち、権記には、

……過夜入道女御入滅、天曆女御莊子女王、年七十九、

と見えてゐる。実名は当然権記の性質からして「莊子」に従ふのが妥当であり、一代要記とは一年の多きを見せてゐるものの、享年も亦権記にいふ「七十九」に従ふべきである。よつて、寛弘五年に七十九歳で永眠したと言ふのであるから、莊子女王の誕生し

たのは延長八年（九三〇）のことであつた。そして、その順位はともかく、莊子女王は恵子女王の妹となるのである。

さて、いよいよ敵子女王の年齢を考へる運びとなつたが、その計報は小記目録の第廿一に、

長和三年七月十六日、太皇太后尊堂逝去事、

——庶人卒、付女、小児、法事——

の如く、例によつて至極簡単に記されてゐて、享年を知るべくもない。従つて、その誕生の年を明かにし難いので、代明親王の王女たちの順位を定めようとしても如何とも出来ない。さりながら、敵子女王の生年はともかく、その順位を定めようとしても如何とも出来ない。さりながら、敵子女王の生年はともかく、その順位なら、やや後代の記録で満足出来るなら、中右記（史料大成本）の大治五年（一一三〇）二月廿一日の条に記してゐる立后例のなかに、

初四条宮

天元五年三月十一日、立從四位上藤遵子為中宮、年廿六

太皇太后 當時執柄女

関白頼忠女、母敵子女王、代明親王第三女也。

とあるので、これを証左として一代要記にいふ「三女」説に従つておかう。

註二 貞元三年十一月廿九日に年号が改つて天元元年となつた故、ここにいふ記事の持つ年紀は厳密に言つてまだ改元されない頃即ち貞元三年の頃としなければならぬ。公卿補任・一代要記・日本紀略等に拠れば頼忠はこの年の十月一日に左大臣より太政大臣に転じてゐる。又、遵子が入内し

たのは既に述べた如くこの年の四月十日のことであつた。それ故、栄花物語のこの記事がこの位置で正確に史実を伝へてゐるなら、その持つ年紀は貞元三年春に定められるべきである。

註三 尊卑分脈は伊尹の子挙賢の左註に「天延二十九卒廿二」と記し、義孝の左註に「天延二十九卒廿一」と記してゐる。因に、天延二年記のこの日の条には、

先少將入滅、
と先少將挙賢の計報のみを伝へ、何故か後少將義孝の計報を漏らしてゐる。

註四 尊卑分脈の伊尹公流には伊尹の子女として十四人記されてゐるが、そのうち、親賢・惟賢・挙賢・義孝・義懷・懷子等の母を恵子女王としてゐる。

註五 本朝皇胤紹運録は、代明親王の子女として先に挙げた女王王三人の次に源姓を名乗る重光・保光・延光等の王子三人の名を伝へてゐるが、これら三人の王子と莊子女王の母を右大臣定方公女であるとな意してゐる。又、尊卑分脈も、その醍醐源氏の条に代明親王の子女として重光・保光・延光・村上女御等の母を右大臣定方公女と註記してゐる。尚、公卿補任も重光（康保元年の条）・保光（天禄元年の条）等の出自のなかで「母右大臣藤原定方公女」と記してゐる。延光（康保三年の条）の出自には母の註記を見ないが、保光のその末尾に、（同重光延光卿）と言つてゐるので、これらの三人の母が同じであつたことは明かであ

る。ところで、肝腎の恵子女王の母が誰であつたかどの書物にも明記されてゐないが、義孝との関係はともかく、他の兄弟をさしおいて保光が恵子女王が五十賀算を営んでゐることよりすれば、母を同じうしてゐるからではなからうか。又、逆に言へば、同母であつた上に本願の義孝と深い関係があつたがために、保光が賀算のことに當つたとも言へよう。そして、保光と恵子女王との間の長幼の序を兄妹としておいたが、その解答の第一歩として保光の年齢から著手すべきである。さて、保光の年齢であるが、それについて、日本紀略はその長徳元年（九九五）五月八日の条に於いて、

從二位中納言源朝臣保光薨。年七十二。成説云。九月薨。

と訃音並に享年を伝へてゐるので、その年齢は明白である。長徳元年に七十二歳で物故したことは公卿補任の同年の条にも七十二歳と記してゐて、両者のいふところが一致してゐるので、長徳元年に七十二歳で薨じたことは信頼してよからう。よつて、逆算するに、保光の生年は延長二年（九二四）となる。即ち、先に考へた恵子女王の生年は延長三年であつた故、保光が一歳年長となり、保光・恵子女王の關係は兄妹となるのである。

註六 公卿補任がその長保三年の条で藤原行成の出自を記して、

故太政大臣謙德（伊尹ク）公男。「実孫」。右近衛少将義孝一男。母中納言源保光卿女。

と言ひ、尊卑分脈がその伊尹公流の義孝の子の行成の左註に、

母中納言源保光女

と記してゐる。両者の言ふところが一致してゐるが、行成の母が保光の女といふことは義孝の室が延光の女であつたと言へるであらう。このことを簡明に記してゐるのは、大鏡の

鏡の

……その義孝の少将、桃園ももきの源中納言保光卿の女の腹にぞ、うませ給へりし君ぞかし、今の侍従大納言行成卿、世の手かきとのゝしり給ふは……

——中・伊尹——

との一節である。

註七 槻の木第十二卷第四号（昭和十二年四月号）所載拙稿「

恵子女王」を参照されたい。

漸く残された為光女の祇子の年齢を考へる運びになつたが、その卒年は、第二項に紹介した一代要記の

……寛和元年七月十八日卒……

——丁集・花山天皇・後宮——

との記事の外に、日本紀略の

十八日辛酉。未刻。女御藤原祇子卒。大納言為光卿女也。懷孕之間。日来病悩。天下哀之。件喪家。前播磨守藤原共政室町西春日北宅。

——寛和元年七月条——

との記事があるが、両者卒日についての記述が一致してゐるの

で、そこに記されてゐる卒日を信頼してよいのであるが、一応、例によつて小右記について見よう。ところが、伝世されてゐる小右記の寛和元年七月の条を含む秋冬の条は略本なので、祇子卒去前後の委細を知り難いものの、その卒日についての記事即ち七月十八日の条は、全文が略文かは不明ながらも、これ亦第一項・第二項に紹介しておいた

午時許弘徽殿女御卒云々、鎌大納言為光朝臣女此女御姪及七月云々……

との記事があるので、一代要記・日本紀略以上の有力な証左として使用出来るのである。それにしても、この三書の記述を見ても分明なやうに、その享年について一言も触れてゐないのである。これには画竜点睛を闕く憾を抱かせられるのである。歴史関係の資料がこのやうな状態なので、歴史書を去つて文学書について祇子卒去の記事についてその享年が記されてゐるか否かを探るべきではなからうか。

先づ榮花物語であるが、榮花物語には祇子の懷妊・病状・退出・卒去・葬送等の模様を千万言を費して縷々として述べられてゐる。さりながら、その凡てをここに援用する必要もないし、その煩に堪へないので、ここには卒去に関する記事のみに限定して援用するなら、

……一条殿の女御は、月頃はさてもありつる御心地に、こたみ出させ給ひて後は、すべて御ぐしもたげさせ給はず。あさましう沈ませ給ひて、たゞ時を待つばかりの御有様なり。大納言泣く／＼万に惑はせ給へど、かひなくて、姪ませ給ひて八月といふにうせ給ひぬ……

——花山たづぬる中納言——

であるが、ここにはその享年は勿論のこと日時さへも記されてゐない。大鏡は如何といふに、そこには、

……女君一所は、花山院の御時の女御、いみじうときにおはせしほどに、うせたまひにき…… ———中・為光———

と報告的に記されてゐるに過ぎない。従つて、如何に手段を尽すとも、現在のところ祇子の享年を明記したものに遭遇出来ないの、その年齢を明かにし難い。よつて、享年より年齢を探ることは一応この辺で打ち切つて、方向を転換して考へて見よう。

註七 第二項とは国文学研究第四十五号（昭和三十六年十月発行）所載の拙稿「婉子女王（二）」を指す。以下同じ。

註八 第一項とは同誌第四十三号（昭和三十五年十月発行）所載の拙稿「婉子女王（一）」を指す。以下同じ。

方向を転換して考へて見ると言つても、目新しい方法があるのではない、祇子と同じく為光を父に持つ男女即ち祇子の兄弟姉妹の年齢より祇子のそれを導き出さうと言ふのである。よつて、そのために尊卑分脈に見えてゐる為光の子女について検討して見よう。いふところの為光の子女はその北家為光公流の下に列挙されてゐる。尊卑分脈の記者のいふところに従ふなら、為光の子女は七男七女あったことになる。即ち、誠信・齋信・道信・公信・長信・尋覚（又は尋光）・良光等の男子及び祇子・藤原義懷室・鷹司左大臣室・藤原道長妾・藤原隆家室・皇后宮女房・安芸守家平室等の女子がそれである。但し、ここに列挙した子女のうち最後

の二人について、尊卑分脈の記者は細字を以て「此外女子二人

一人皇后宮女房 一人安木守家平室」と記してゐるが、思ふにこれは後になって思ひ出して付け加へたものか或ひはこの二人の存在に不審を抱いたために別に記したもののかいづれかであらう。そのいづれにもせよ、今のところ深く追求する必要はなからう。といふのはこれらの子女たちの生母が誰であるかが問題なので、それを闡明にすることが急務であるからである。

これらの子女のうち、尊卑分脈がその母の註記を加へてゐるのは誠信・齋信・道信・公信等の四人のみである。即ち前二者の母を右中將敦敏女とし、後二者の母を太政大臣伊尹女と注意してゐる。このやうに男子四人の母を明記してのみであるから、忝子以下の女子たちの母が何人であつたかについては尊卑分脈に即する限り明かにし難いのである。

さて、尊卑分脈以外に為光の女子の母についての記述したものはないかと思つて探つて見たところ、大鏡と栄花物語とに遭遇した。先づ、大鏡は如何といふに、そこには、

……御男七人、女も五人おはしき。女二人佐理の兵部卿の御妹の腹、今三所は一条の摂政の御女の腹におはします……女君一所は、花山院の御時の女御、いみじうときにおはせしほどに、うせたまひにき。今一所は、入道中納言の北ノ方にてうせ給ひにき……また、一条の摂政殿（伊尹）の御女の腹の女君たち、三四五の御方。三の御方は、鷹司殿のうへとて、尼になりておはします。四の御方は、入道殿の俗におはしましゝをりの御子うみてうせ給ひにき。五君は、今の皇后宮に

さふらはせたまふ……

——中・為光——

と記されてゐる。一万、為光の男子についての記述は如何といふに、誠信・齋信・道信・公信・尋光・良光等六人の名が見られるが、それぞれの生母については、

……男君たちの御腹、皆あかれ／＼におはしましき……

——同上——

と一括して言つてゐるので、一々明かにし難いのである。それ故、尊卑分脈と大鏡とを併せ看るなら、彼は男子の生母を記し、此は女子の生母を記すといふ風に、彼此相反する記述をしてゐるのである。

次に栄花物語の記述は如何といふに、先づ目につくのは、

一条の大納言は、母もおはせぬ姫君を、我御ふところにて、おほしたて奉り給へれば、万いとつゝましき世の御心もちあなれば、つゝましう思しながら、今の帝の御をち義懐中納言は、かの一条大納言のおはい君の御弟にて物し給ひければ、それをたよりにて、常に中納言をせめさせ給ふなりけり……

——花山たづぬる中納言——

との一節である。但し、ここに見える「おはい君の御弟」との文字はいささか諒解し難いので、他の諸本について検討する必要がある。よつて日本古典全書本を見るに「大い君の御を」とあり、その頭註として松村博司博士は、

「を」とこの「こ」字は底本「と」と紛はしい字が書いてある。

と述べられてゐる。又、富岡乙本を底本としてゐる古典文庫本は

「おほむきみを北方」と作つてゐる。この個所を尊卑分脈・大鏡等より得た知識によつて解釈するなら、伊尹の子義懐が為光の女の大い君の弟とするより、義懐が大い君の夫とする方が妥当であることに納得がつくであらう。それはそれとして、この個所より少し後に、

かゝる程に、一条の大納言の御姫君したてて参らせ給ふ。この姫君は、小野の宮の大臣清慎公の御太郎、敦敏の少将の御女の腹に、男君女君とおはしけるなり。手かきの佐理の兵部卿の御妹の君の御腹なりけり。父殿は九条殿の九郎君、為光ときこゆ。

——同上——

とあり、次いで、為光の永眠のことを伝へた記事につづけて、

……女君達今三所ひとつ御腹に在するを、三の御方をば寝殿の御方と聞えて、又なうかしづき聞え給ふ。四五の御方々も在すれど、故女御と、寝殿の御方とのみぞ、いみじき物に思ひ聞え給ひける……

——見はてぬ夢——

との一節がある。因に「女君達今三所ひとつ御腹に在する」との一節の真意は、次に挙げられてゐる三・四・五の御方たちが母を同じうしてゐたことを伝へようとしたのであらうが、この人たちの母について注意してゐないので、祇子と母を同じうしてゐたのかそれとも母を異にしてゐたのか、この一節からはいづれとも解釈し得るものの、後文に一条殿——故為光邸——の処分が寝殿の上に一任されたことが見えてゐるので、伊尹女を母としてゐたと考へるべきであらう。そして、為光の男子の方は如何といふに、誠信・斎信・道信・公信・尋光等が登場してゐるが、そのい

づれも母についての記述を闕いてゐる。それ故、栄花物語も亦、子女の母に關する点に於いては大鏡と同じ現象を呈してゐると言へよう。

註六 一条殿の伝領關係について詳しく述べる余裕を今持つてゐない。いづれ稿を改めて考へて見たい。

為光の子女の母についてこれまでに知り得たことは、直接当時の記録からでないの、或ひは正鵠を射てゐないかも知れない。さりながら、このことについて教へてくれる当時の記録がない現在としては、一応、尊卑分脈・大鏡・栄花物語等の記述に従ふの外はなからう。よつて、ここに得られた知識を整理するなら、次の如くなるであらう。

為光には前後二人の北の方があつた。即ち、敦敏女を先づその北の方に迎へたが、その永眠後に伊尹女を北の方に迎へたのである。そして、この二人の北の方から

敦敏女——誠信・斎信・祇子・義懐室。

伊尹女——道信・公信・三の君・四の君・五の君。

の如く、数人の子女を儲けてゐる。但し、この表からはこれらの子女、特に男子の順序を知ることが出来ない、それを明かにするために別の方法を講ずる必要があらう。

男子のうち、公卿に列したのは誠信・斎信・公信の三人であるが、公卿補任によつてこれら三人の輩行を探るに、誠信についてはその任参議の年即ち永延二年（九八八）の条に、父右大臣為光公一男。母左少将敦敏二女。

と見え、斎信については同じくその任参議の年即ち長徳二年（九
九六）の条に、

故太政大臣為光卿二男。母右少将敦敏女。

と見え、公信についてはその任参議の年即ち長和二年（二〇一三）
の条に、

太政大臣恒徳公第六男。母一条摂政謙徳公第二女。

と見えてゐる。そして、各人の任参議の年の年齢を、二十五・三
十・三十七と注意してゐる。よつて、これによつて各人の生年を
探るに、誠信は康保元年（九六四）に、斎信は康保四年（九六
七）に、公信は貞元二年（九七七）に誕生してゐるのである。こ
こに逆算して得た生年は、誠信の薨じた長保三年（一〇〇一）当
時三十八歳、斎信の薨じた長元八年（一〇三五）当時六十九歳、
公信の薨じた万寿三年（一〇二六）当時五十歳であつたが、この
享年より逆算した数字と一致してゐる故、信頼出来るであらう。
又、公卿には列しなかつたが歌人として有名である道信について
中古歌仙三十六人伝が、

九条殿孫恒徳公男。母一条攝政女。大入道為御子云云。寛

和二年十月廿一日叙従五位上。右大臣為光公第五子。為攝政。加元服。仍叙之。

と注意してゐる如く五男に数へなければならぬが、山岸徳平博
士が八代集全註に翻印された書陵部蔵の二十一代集才子伝——江
戸時代の摺紳家の筆に成るものと言はれてゐる——は、
道信者。恒徳公之第四子。母謙徳公之女也……

の如く四男に作つてゐる。四・五いづれに従ふべきか取捨に迷は
ざるを得ないが、ここでは両説の存することを紹介するに留めて

おかう。尚、道信の卒年については第一項に於いて小記目録（史
料大成本）によつて触れておいたが実に正暦五年（九九四）のこ
とであつた。但し、そこには享年についての記載は見られない
が、二十一代集才子伝は、

……正暦五年卒。時年二十三。早世惜哉。

と何に拠つたか明かではないが、享年を明記してゐる。仮に二十
一代集才子伝の所説に従ふなら、道信が元服したのは十五歳の時
のこととなり、生れたのは天禄三年（九九二）のこととなるので
ある。

註七 誠信の享年は日本紀略にも記されてゐるが、権記（史料
大成本）に

……右衛門督此曉入滅云々……恒徳公一男也、権中納言
同母兄也……年卅八

——長保三年九月三日条——

とあるのを以て証左とすべきであらう。斎信の享年は日本
紀略に、公信の享年は日本紀略・一代要記等に見えてゐる
が、凡て公卿補任の所説と一致してゐる。

註八 安藤太郎氏は、文学・語学第十八号（昭和三十五年十二
月発行）に掲載された「道信集について」のなかで、寛和
二年に元服した道信の年齢を十五歳と推定されてゐるが、
その根拠については何事も述べられてゐない。

栄花物語の記述が真実を伝へてゐるなら、祇子が花山天皇の後
宮に入った頃にはその母である敦敏女は既に鬼籍に入つてゐて、

その父為光の北の方としては伊尹女が備つてゐたのである。又、前に考へた道信の生年は正鶴を得てゐるなら、敦敏女と伊尹女とが交替したのは天禄三年以前のことと言へよう。又、観点を換へるなら、祇子が花山天皇の後宮に入つたのは永観二年のことである故、祇子の年齢はともかく道信は加冠以前の十三歳であつた。この二人の状況から考へられるのは、その年齢差は明かではないにしても祇子が道信より年長であつたといふことであらう。一方、永観二年入内當時に於ける祇子の同母兄の誠信・斎信の状況は如何と言ふに、公卿補任の教へるところに拠れば、誠信は廿一歳で従四位下左近少将、斎信は十八歳で従五位下侍従の如く、既に官界に活躍してゐた。それ故、祇子の年齢を考へる場合、いくら年長に見積つてもこの年十八歳とは考へられない。即ち、仮に斎信より一歳年少と見て十七歳であつたとすると、安和元年（九六八）の誕生となり、花山天皇と年を同じうして呱呱の声を挙げたことになるのである。他方、永観二年當時の年齢を如何に若く考へて見ても、道信が十三歳であつた故、それ以下には数へられないであらう。仮にこの時祇子が道信より一歳年長の十四歳であつたとすると、天禄二年（九七一）の誕生となるのである。

註九 日本紀略は華山院前紀に於いて、

……安和元年十月廿六日誕生……永観二年八月廿七日。

円融
先皇讓三位於今帝。先帝廿六。
今帝十七。

と記し、寛弘五年（一〇〇八）二月八日の条に於いて、

今夜亥刻。華山法皇崩。年四十一。

と記してゐるが、ここに見えてゐる年紀と御歳との關係は

凡て一致してゐる。

以上の如くにして考へられる祇子の生年は安和元年より天禄二年までの四年間のうちのある年といふことになるのであるが、ここに僧綱補任（大日本仏教全書本）を續くなら、下限を今一年繰り上げなければならなくなるのである。といふのは、その第三・長保四年の条に為光の男子尋光の任権律師の記事が見えてゐて、そこにその際の年齢が記されてゐるからである。次に尻付ともいふべき尋光の名の下に記されてゐる細註を記しておかう。

同（遠云、七月廿六日）任。天台宗。延暦寺。
寬仁大僧都。太政大臣為光息男。（圓州二）

又、同じく第三・長暦二年の条に計音を伝へてゐるが、そこには僧正尋光の下に、同じく細註として、

三月廿六日入滅
（圓六十八）

と出てゐる。長保四年（一〇〇三）に三十二歳、長暦二年（一〇三八）に六十八歳であつたといふことより逆算するなら、尋光の生年は天禄二年（九七一）となるが、この年は恰も先に推定した道信の誕生前一年に相当してゐる。尋光の輩行なり生母なりはどの書物にも記されてゐないこととて知るべくもないが、道信より一年前に生れてゐるといふことより当然考へられることは、道信の直兄であつたといふことである。従つて、尋光は為光の四男（或ひは三男）に相当し、永観二年には十四歳であつたのである。若し、尋光の生母が伊尹女であつたとすれば、この年に敦敏女が祇子を生むといふことも起り得るが、仮に敦敏女が永眠して伊尹女が為光の北の方となつたとすると、永眠・結婚と踵を接して起り得るとは考へられないので、祇子の誕生と尋光の誕生との

間には少くとも一年の間隔が存してゐたと考へるべきではなからうか。さすれば、一応、祇子は安和二年（九六九）に誕生したことになるであらう。従つて、永観二年には十六歳を算へてゐたであらう。然し、この推定は尋光を一説に従つて為光の三男と看做した場合であつて、若し、四男とすれば、二男の齋信と四男の尋光との間に今一人の男子を考へなければならなくなるので、祇子の生年を一概に安和二年と推定出来なくなるであらう。

小右記を續くに、その長和四年（一〇一五）四月十二日の条に於いて、

阿闍梨守聖一昨逝去云々、守聖故太政大臣^{為光}子、与大納言齋信^{為兄弟}、而長齊不解、齋信云、故太相国專不為子、仍不可為兄弟云々、

と、為光の子の守聖といふ人物の永眠を報告してゐる。ここに為光が守聖をその子としなかつたといつてゐるが、一体その理由は何であつたらうか。憶測を加へれば、或ひは守聖の出生に疑義が存したからとも、或ひは何等かの理由によつて義絶したからとも、種々その理由は考へられようが、実質が齋信と兄弟であると言つてゐるからには、為光の子であることには間違ひなからう。

その際、ここには享年乃至輩行が記されてゐないが、齋信より年少ではなかつたらうか。といふのは、公卿補任によつて為光の一・二男には誠信・齋信が備つてゐることを知つてゐるからである。それ故、守聖の輩行をいくら高く見積つて見ても、三男以上には考へられないであらう。又、小右記のかの記事には守聖の生母に関する記述を闕いてゐるが、その齋信と兄弟と記してゐると

ころより憶測を加へるなら、或ひは齋信・守聖は母を同じうする兄弟であつたと考へられなくもなからう。尤も、実質がこのやうに記したのは、為光の亡き後で齋信が一家の棟梁であつたからであらう。それはそれとして、仮に齋信と守聖とが同母であつたとすれば、延いては守聖と祇子とも亦同母であつたとしなければならぬであらう。ここに到つて、考へなければならぬのは守聖と祇子との長幼の問題であらう。そのいづれが年長であつたとしても、齋信の誕生した年を籠めて前後四年間に三人の出生を見たこととなり、問題は益々紛糾してくるのである。守聖を兄とすれば祇子は安和二・天禄元——先には尋光の生れた天禄二年より一年の間隔をおいてと言つておいたが——兩年に生れたことになり、守聖を弟とすれば祇子は安和元・二年の頃に生れたことになり、生誕の年の推定は動搖して極まるところを知らない状態に陥るのである。

道信の輩行を手懸りにして祇子の生年を考へようとしたが、結局、收拾すべからざる状態に陥つてしまつたのであるが、順当ならば、永観二年に祇子が入内した際には花山天皇より年少であつたらう。この仮定を拠点として当面の問題を整理するなら、祇子は花山天皇より一二歳年少であつたらう。さすれば、花山天皇は安和元年に誕生されてゐる故、祇子は安和二年乃至天禄元年の誕生となるであらう。従つて、ここに見出した年紀は、先に道信を四男として考へた場合の祇子の生年とも、道信を五男として考へた場合のそれとも何等齟齬するところはない。推測に推測を加へて来て恐縮ではあるが、現在のところ安和二年に生れたものと看

做しておかう。従つて、入内した永観二年には祇子は十六歳を算へてゐたことになるのである。

例によつて、祇子の輩行を考へるべきであるが、先に挙げた栄花物語の花山たづぬる中納言の巻に藤原義懷を為光の大きい君の夫としてゐることと、同書の見はてぬ夢の巻に三御方以下を挙げてゐることよりして、その二女であつたことに納得がゆくであらうから、改めて考へる必要はなからう。が、それに対して、文学作品の記事を以て直に史実にするとの非難が生じるなら、当時の記録そのものでなくて残念ではあるが、これ亦既に援用しておいた日本紀略の永観二年十一月七日の条の「大納言藤原為光卿第二女祇子」と一代要記の花山天皇・後宮の項・祇子の下の「大納言為光二女」との記述を以てくるなら、一応その二女であることの証左とするに足りるであらう。

又、祇子の母の出自であるが、これは今まで考へて来た諸書す

べて藤原教敏女といふことで一致してゐるので、祇子は教敏女の所生であることは疑へないであらう。但し、ここに問題になつてくるのは、一代要記が教敏一女としてゐるのに對して、公卿補任の誠信の任参議のことを記した記事のなかに教敏二女としてゐる如く、両書が輩行を異にしてゐることである。この問題に對して、尊卑分脈は教敏の女として二人掲げてゐるが、その先なるものの右註として

恒徳公室参議誠信女

と注意してゐる。これによつて察するに、尊卑分脈の編者は為光の北の方即ち祇子の母を教敏一女と考へてゐたと言つてよからう。三書のうち二書が一致して一女と看做してゐることとて、筆者も亦祇子の母を教敏一女と考へておかう。さりながら、この輩行問題の解決は、当時の記録の記事を得て始めてなし得るのである。

——一九六一・五・五——